

# 音楽と造形の総合的な表現教育の展開

—保育内容指導法（表現）の授業における「音環境を描く」試みから—

山 野 てるひ

(初等教育学科教授)

ガハプカ 奈美

(初等教育学科准教授)

岡 林 典 子

(初等教育学科准教授)

## I. はじめに

幼児期の子どもは、五感を通して身近な環境と関わり、その体験をもとに音声や、身振り、色や形を総合的に用いながら、多様な表現を試みている。そうした子どもと関わる保育者には、子どもの感じる心が動き、豊かな感性が育つような環境を工夫して整え、自分なりの方法で表し伝えようとする多様な子どもの表現に気づき、受け止める力が求められる。近年では、保育現場でも子どもの感性や表現力の育ちに課題意識をもった取り組みが行われてきている<sup>1)</sup>。また、保育者養成機関においても、領域「表現」にかかわる授業が模索されたり<sup>2)</sup>、現場と連携した試みがなされたりしている<sup>3)</sup>。

このような背景に沿って、われわれ筆者3名も子どもの総合的な表現を受け止め、育むことのできる保育者の養成に向けて、2008年度前期より短大初等教育学科1回生の保育内容指導法（表現）の授業において、新たに音楽と造形が緊密に連携する授業展開を共同で行なう試みを始めた。そして、これまでに音楽教育と美術教育の立場から2008年度の授業内容を振り返り、本紀要にまとめるとともに<sup>4)</sup>、諸感覚の統合を考える芸術教育の研究会での発表を行なった<sup>5)</sup>。また、幼稚園の園内研究会に参加して、保育現場との関わりにおいても授業内容を検討している<sup>6)</sup>。

そうした中で浮かび上がった課題は、①音を描画する活動に、子どもの音環境としては欠かすことのできない自然音を取り込むこと、②音と身体の動きが連動する体験を取り入れること、③授業内容を実際の保育の場に生かすことのできる具体的な指導法の考案、④学生へのア

ンケート調査の質問内容の検討、などである。

そこで、筆者らはこれらの課題について話し合い、2009年度の保育内容指導法（表現）の授業内容を改善し、新たに「音声や言葉のリズム・抑揚と動きを連動させた活動」や「自然音と動きを連動させた活動」、サウンドスケープ理論に基づくサウンド・エデュケーションから「音日記の作成」や「京女の音環境を描く描画活動」、さらに「保育指導案の作成」などの内容を加え、再構成した。また、「授業の振り返りシート」を作成し、毎回授業後に各回の授業内容について、学生にどのような気づきや発見があったのか、またどのような感想を持ったのかを記述させて、授業内容の検討を行った。

本稿では、2009年度に新たに加えた授業内容の中から、「音声や言葉のリズム・抑揚と動きを連動させた活動」や「自然音と動きを連動させた活動」、「音日記の作成と描画に表す」や「京女の音環境を描画に表す」について、「実践内容」と「振り返りシート」<sup>7)</sup>をとおして授業の分析・検討を加え、音楽と造形の総合的な表現の感性を育む教育課程のあり方を探ることを目的とする。

## II. 授業の実際 —授業内容の分析と考察

### 1. 第6回<sup>8)</sup>の授業から—

「音・声・言葉のもつリズムや動きを身体で表す」について

日本語には多くの擬音語、擬態語がある。子どもは日常生活の中で、それらの擬音語を唱えながら手や身体を動かしたり、線や図を描いたりして、リズムカルな音の響きや動作の面白さ

を楽しんでいる。

また、子どもの周りにはさまざまな自然音が溢れている。子どもが生活の中でいろいろな音に出会い、五感を通して感じ取るためには、保育者自身が音や声、言葉に意識的に関わる必要がある。保育者が自然音や擬音語、擬態語のもつ律動感や力動感を感じとり、適切に保育において用いるなら、子どもの感性やイメージに具体的に働きかけることができるだろう。

そこで、第6回の授業では、以下のような〈ねらい〉に基づき、①擬音語と動き、②自然音と動きの2つの内容に基づく課題を設定し、実践した。

#### 〈授業のねらい〉

音や声のもつ動勢、高さ、速度、進行、リズムなどを五感を通して感じ取り、全身を使って動きで表現する。

#### 〈授業の内容〉

##### (1) 擬態語と動き

##### 【課題1】動作を伴う擬態語を探そう。

「回る」、「飛ぶ・跳ぶ」、「落ちる」の三種の動作に関わる動詞から連想する擬音語を学生に考えさせ、板書する。

##### 例) 動詞

##### 擬態語

「回る」 → くるくる、からから、ころん

「飛ぶ・跳ぶ」 → ひゅーん、びょん、ふわり

「落ちる」 → ストン、ドスン、ポトッ

##### 【課題2】言葉のリズムの違いを感じよう。

「清音」、「濁音」の違いや日本語特有の「長音(ー)」、「促音(っ)」、「拗音(きゃ、しゅ)」、「撥音(ん)」により、上記の擬態語のリズムが変わることを知る。

例) 2音節の語基	くる	清音	くるくる
反復形	くるくる	濁音	ぐるぐる
		長音	くーるくーる
		促音	くるっくるっ
		拗音	くりゅくりゅ
		撥音	くるんくるん

##### 【課題3】擬態語の音声の律動を感じ、動きに表そう。

4～5名のグループに分かれ、課題1、2で挙げられた三種の動作を表す擬態語から、それ

ぞれ対比(コントラスト)を感じる二語を選び、動きを考える。考えた動きを擬態語の音声を伴って表現し、グループごとに発表する。

##### (2) 自然音と動き

##### 【課題4】自然音を聴いて、動きを感じよう。

・雨の音—「弱い雨」と「強い雨」をCD<sup>9)</sup>で流し、対比させながら動きを感じ取る。

・風の音—「弱い風」と「荒野をわたる風」をCD<sup>10)</sup>で流し、対比させながら動きを感じ取る。

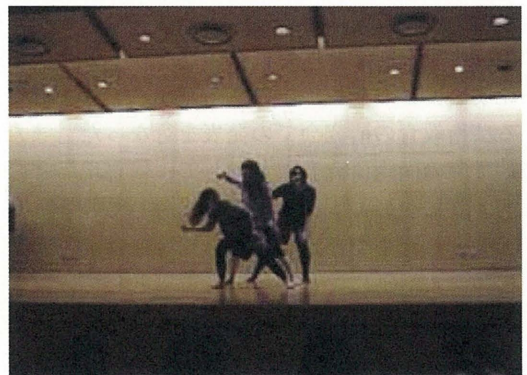
##### 【課題5】自然音の律動を感じ、動きに表そう。

4～5名のグループに分かれ、「雨の音」もしくは「風の音」からそれぞれコントラストを感じる動きを考えて、身体の動きで表し発表する。

#### 〈結果の分析と考察〉

話し合いと練習時間には15分程度を当てた。この時間配分は十分とは言えないにしても、学生たちは声を出し合いながら、一人一人が動いたり、互いの動きを確認しながら合わせたりして、対比をどのように表現するかを工夫している様子であった。

グループごとに舞台上上がって発表する形式は、音から感じた動きを自分自身の内部で完結せず、他者に「伝達する」ことでよい緊張感をもたらしたと思われる。時間的な制約も反って音を聴きながら動くという即興性が生かされ、纏まりすぎず、音を聴いたときの生の感情が表われていたように感じられた。(写真1・写真2)



〈写真1〉「擬態語」を動きに表す(「回る」)



〈写真2〉「擬音語」を動きに表す（「跳ぶ」）

しかし、自然音の「雨」や「風」の場合には、傘を差して歩いたり、強い風にむかって吹き飛ばされそうになりながら足を踏ん張る様子など、音（音事象）から連想された日常の情景を再現するパントマイム様の表現も数例見られた。これは、我々がねらいとする「音そのものから五感をとおして感じとった律動感や力動感を動きのイメージで表す」ことを初めて体験する学生にとっては、難しい課題であったのかもしれないが、繰り返し体験することによって、こうした表現にも広がりや変化が現れるだろう。

振り返りシートには、「はじめて音を聞いたときは、頭で考え込んでしまって身体が思うように動きませんでした。まず、考える前に身体を動かしてみようと思って身体を揺らしているとどんどん動いてきました。一中略— 身体を動かしているととても気持ちよくて開放感がどんどん出てきました。考えるよりもまず動いてみるのが大切なのだと思いました」など、初めての体験に戸惑いを感じながらも、自分なりに工夫して取り組むことにより、音や動きに没頭する体験に開放感や喜びを味わったという記述もみられた。

また、「同じ音を聞いても、人によって感じ方や、注意を向けるところが全然違うことがわかりました（傍点筆者）」等、同じ現象としての音を聞いても、それを知覚する枠組みが人によって異なっていることに気づいたものも多くみられた。そして「普段何気なく耳にしている音だけど、改めて表現してみて、自分の中でそ

の音に対するイメージを感じることができたとし、皆の中のイメージも見られたと思う」と、我々がねらいとする要件を受け止めることの出来た学生がいることは、この課題の妥当性、有効性を示唆するものであろう。

## 2. 第7回の授業から—

### 「音声や言葉のリズム・抑揚と動きを連動させた描画活動」について

幼児は紙の上に描画材を用いて運動やリズムを表出することへの興味から「なぐり描き」を行う。2歳児が擬音語を発しながら絵を描いているVTRを見て、子どもの声、動き、描線が繋がっていることに意識を向ける。また、前回の授業で体験した擬態語と全身の動きとの関わりを思い起こしてみる。そのうえで、下記の擬態語を音声として発しながら違いを感じ、コンテパステルを用いて画用紙に動きを描く。

そこで、第7回の授業では、以下のような〈ねらい〉に基づき、①擬態語の音声を描く、②自然音を描く、の2つの授業内容に基づく課題を設定し、実践した。

#### 〈授業のねらい〉

声や音のもつ動勢、高さ、速度、進行、リズムなどを五感を通して感じ取り、色や形で表現する。

#### 〈授業の内容〉

##### (1) 擬態語の音声を描く

用いた擬態語は以下の6種類である。

「くるくる」と「ぐるぐる」

「ゆらゆら」と「ゆーらゆーら」

「しゅっ」と「しゅっ、しゅっ」

#### 【課題6】「くるくる」を描いてみよう。

自分の動きを感じながら

- ①普通の声で「くるくる」と言いながら描く。
- ②「くるくる」と言いながら、だんだん声を大きくして（クレッシェンド）描く。
- ③「くるくる」と言いながら、だんだん声を小さくして（デクレッシェンド）描く。

#### 【課題7】「ぐるぐる」を描いてみよう。

自分の動きを感じながら

- ①普通の声で「ぐるぐる」と言いながら描く。



②「ぐるぐる」と言いながら、だんだん声を大きくして（クレッシェンド）描く。

③「ぐるぐる」と言いながら、だんだん声を小さくして（デクレッシェンド）描く。

【課題8】「ゆらゆら」を描いてみよう。

①普通の声で「ゆらゆら」と言いながら描く。

②普通の声で「ゆーらゆーら」と伸ばして言いながら描く。

【課題9】「しゅっ」を描いてみよう。

①普通の声で「しゅっ」と言いながら描く。

②「しゅっ、しゅっ」と短く切って言いながら描く。

③「しゅっ」と語尾上がりで言いながら描く。

④「しゅっ」と語尾下がりで言いながら描く。

(2) 自然音を描く

【課題10】「雨の音」を描いてみよう。

①「弱い雨」のCDの音を聞き、描く。

②「強い雨」のCDの音を聞き、描く。

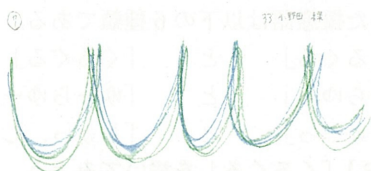
【課題11】「風の音」を描いてみよう。

①「弱い風」のCDの音を聞き、描く。

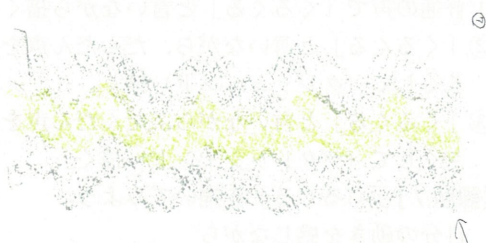
②「荒野を渡る風」のCDの音を聞き、描く。

〈結果の分析と考察〉

紙幅から学生が課題に従って描いた全ての描画を掲載することは叶わないため、【課題8】～【課題11】について参考写真を示す。



〈写真3〉【課題8】①「ゆらゆら」を描く



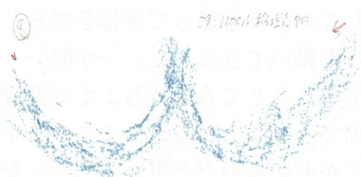
〈写真4〉①「ゆらゆら」を描く



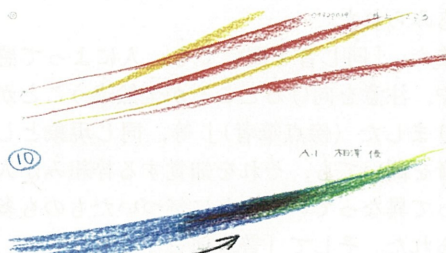
〈写真5〉②「ゆーらゆーら」を描く



〈写真6〉②「ゆーらゆーら」を描く

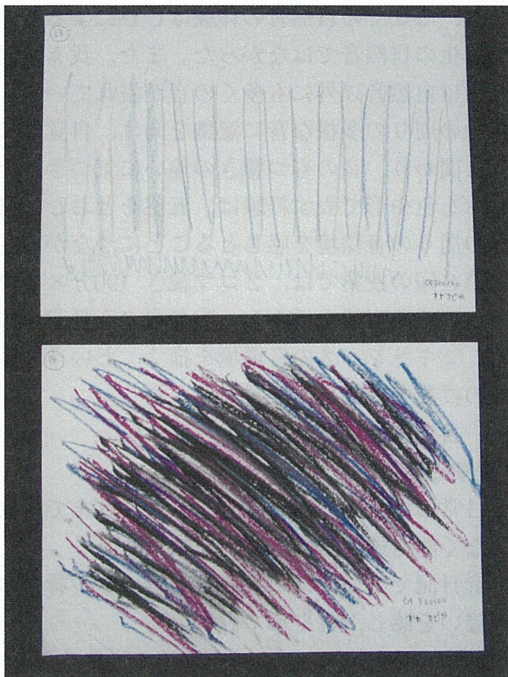


〈写真7〉②「しゅっ」を描く



〈写真8〉【課題9】「しゅっ」を描く





〈写真9〉【課題10】「弱い雨」と「強い雨」を描く



〈写真10〉【課題11】「弱い風」と「荒野を渡る風」を描く

授業の導入において、前回授業「音のもつ動きを身体で表す」の内容を思い起こしたうえで2歳児のなぐり描きの様子をVTRで観察した。VTRは子どもが「ぴゅっぴゅっ、ぴゅっぴゅっ」と唱えながら線をひく姿や、「絵描き歌」を描くときに発した声と調子、速さ、線が連動して次第に感情が高まり、もとの歌詞にはない擬音が出るとともに絵の線や形も高揚してゆく様をつぶさに記録したもので、学生たちは強い関心を示していた。

ところが、いざ最初の課題である〈【課題6】「くるくる」を描いてみよう〉にとりかかると、なかなか声が出ず、ぼそぼそ呟いているものや内言で描いているものが多くみられ、予め丸い外形の形が意識されるためか線もこわばって伸びない。前回の授業は、学生たちの音と動きに対するブレンストーミングの役割を果たすことができたと考えていたが、1週間の時間の経過によって、少し開放された気持ちがまた萎縮してしまったようにも思われた。

しかし、課題が進むに従って学生の様子に変化が見え始めた。離れた座席に座っている数人の学生の発声が少し大きくなるとその隣席の学生の声も元気になり、またその音声が無言のうちに座っている学生の声に伝わってゆくのである。そしていくつかの纏まった「ぐるぐる」という音声の塊が、次第に繋がって教室全体に「ぐるぐる」の大唱和が響き、筆者らの予想を超えて学生が描画に非常に集中していった。

振り返りシートに書かれた何名かの次ような感想が、その変化をよく伝えている。「前略……はじめは最終の絵の出来上りを考えて控えめに描いてしまいましたが、途中から自由に思いのままに表現することができました。はじめのと比べてみると、後者のほうが元気に表現されている気がして自分でも驚きました」や「前略ー最初は口に出して手を動かしてゆくのが難しく感じましたが、だんだん気持ちがのってきて、『ぐるぐる』を描いているとき、ストレスが解消されていくように、思いつき紙に向かっている自分がいました」、「前略…大きな真っ白の紙に何枚も描くのは最初はもったいな

くて遠慮がちになってましたが、描いてゆくうちに気持ちよくなっていったので、思いっきり描きました」など、自ら発声する声を聞きながら描画することによって心身が徐々に開放されたようである。そして自然音を描く課題においては、風の音を聴いて「この風はどんな色で、どんな形で、大きさはどうだろうと思いながら描いていると、自分が風になったように感じました。はじめのほうは、指先で描いている感じでしたが、だんだんと身体全体で肩から大きく描けるようになりました。自分の内側の言葉ではいえない感情が紙の上に表れるような気がしました」といった表現の本質に触れるような感想も見られるようになった。

さらに下記の記述からは、学生たちが擬態語を描画で表す過程で、音声と描画表現の関係や擬音語の語尾変化の規則的特徴<sup>11)</sup>にも気づいていったことがうかがえる。「言葉に音をつけるだけで、黙って描いてる時よりもいろいろなイメージが浮かびました。『くるくる』と単調に言いながら描く場合と強弱をつけて言う場合、同じ言葉なのに使う色やコンテの濃さが全く違いました。大きな声を出している時の筆跡は濃く、渦巻きも大きくなりました」「前略…そして『くるくる』でも『ぐるぐる』と濁音をつけるだけで強く濃く描きたい感じがしたり、『しゅー』と『しゅっ』では、『しゅー』は続く感じで『しゅっ』は直ぐに終わってしまう感じと、伸ばしたり「っ」を入れたり、イントネーションで表現のイメージがすごく変わるんだなあと思いました」などである。

このように、学生たちは音声と言葉の意味、動きの結果としての描画が相互に深く関連しており、また音声が自分の内面活動ばかりでなく他者の表現にも影響を及ぼし、呼応しあうダイナミズムを体験できたと考えられる。

### 3. 第8回の授業から—

#### 「京女の音環境を描く」について

これまでの授業において、学生は自分の発する声や自然音と動きという視聴覚の関係性に生じる力を体験をとおして感じ取ってきている。

ただ、ここでの自然音の体験はCDによるもので、生の自然音ではなかった。また、我々の周りには自然音以外にも多くの音が溢れている。自分の周りの多様な音に意識を向け、自覚的に音と関わり、音のもつ響きの違いに気づき、それらを色や形で表す経験は、五感をとおして自分の周りの音環境を感じとることにつながる。

第8回の授業では、2コマ続き(90分×2コマ)の授業形態を活かし、①各自の音日記を描く、②キャンパスの音環境を描く という2種類の授業を構成し、実践した。

#### (1) 各自の音日記を描く

##### ＜授業のねらい＞

- ・日常の身近な音に耳を澄まし、これまで何気なく聞き過ごしてきた音に気づく。
- ・音日記で気づいたいろいろな音のもつ響きの違いを感じ、色や形で表す。

##### ＜授業の内容＞

#### 【課題12】音日記をつけてみよう。

前回の授業の終わりに、日常の音に耳を傾けて音日記をつける宿題を課した。また、音日記をつけるに当たり、以下のルールを設定した。

- ① 1週間のうち3日間を選び、その日に聞こえた音を表に記入する。(表1)
- ② 1日に聞こえた音の中から、以下の6つを書き出す。(表1)
  - a. 朝起きてすぐに耳にした音
  - b. 朝外へ出て一番に耳にした音
  - c. 出かけた先で一番気に入った音
  - d. 出かけた先で一番嫌だと感じた音
  - e. 今日一日の中で一番美しいと感じた音
  - f. 夜寝る前に最後に耳にした音
- ③ 1日に聞こえた音を発生源で3つに分類する。
  - I) 自然、II) 機械、III) 人間 (表2)

#### 【課題13】音日記を描いてみよう。

宿題として、完成させた『音日記』の表1よりa.～f.の6種類の音を選び、それぞれの音のもつ高低、強弱、リズム、進行などをコンテパステルを用いて色や形に表す。



〈結果の分析と考察〉

学生の提出した音日記の一例を以下の表1，2に掲げる。

学生たちは気づいた音を文字によって言語化することで、自分の周りにはどのような音が、どのくらい存在しているかに気づき、自分の生活の音環境について意識を向けられたことがわかるだろう。

『音日記』 今日一日聞こえた音を書こう。

表1 学生Aの音日記①②

7月10日	7月11日	7月13日
携帯のアラーム フライパンの卵を 焼いてときの ジュッ!! 自転車をこぐ音 加茂川の水の音 車 横断歩道 友達・先生の声 ホトトギスの鳴き声 傘にあたる雨 川のザーツとする音 家の玄関を開ける音 換気扇 TV キーボードを弾く音 シャーペンのカチカチ 紙の音 携帯電話で話す声	携帯のアラーム 布団をたたむ音 自転車をこぐ音 加茂川の水の音 風がビューッとする音 自転車の車輪が回る音 ブレーキの音 車、横断歩道 店の中で話す人たちの声 買い物袋のカサカサ 木の葉っぱの音 自転車をとめる音 玄関、TVの音 水道の音 ペンをおく音 TELの声 目覚まし時計のカチカチ	携帯のアラーム 布団をたたむ音 オーブントースターの音 水道の音 箸を置く音 自転車のこぐ音 風の音“ぶわっ” 加茂川の水の音 木の葉っぱの音 車の音 友達の声 先生の声 すずめの鳴き声 本をたたむ、入れる エレベーターの音 自分の足音 友達の鼻歌 パソコンのウィーン 川の音の水の音 TVの音、音楽 布団をかぶる音
a. アラーム b. 自転車をこぐ音 c. ホトトギス d. 車の音 e. c 同様ホトトギス f. 携帯のカチカチ打つ音	a. アラーム b. 布団をたたむ音 c. 車輪の回る音 d. 車の音 e. 風の吹く音 f. 目覚まし時計のカチカチ打つ音	a. アラーム b. 布団をたたむ音 c. 風の音“ぶわっ” d. 車の音 e. 水の流れる音 f. 布団をかぶる音

表2 学生Aの音日記③

	7月10日(金)	7月11日(土)	7月13日(月)
自然	加茂川の水の音 ホトトギスの鳴き声 傘にあたる雨 川のザーツとする音	加茂川の水の音 風がビューッとする トンボがとぶ瞬間	風の音“ぶわっ” 鴨川の水の音 すずめの鳴き声 木の葉っぱの音
機械	携帯のアラーム 自転車をこぐ音 換気扇の音 キーボードを弾く音	携帯のアラーム 自転車をこぐ音 自転車の車輪が回る音 ブレーキの音 目覚まし時計のカチカチ TVの音	携帯のアラーム フライパンの卵を焼いてときのジュッ!! オーブントースターの音 自転車をこぐ音 TVの音、音楽 パソコンのウィーン
人間	友達・先生の声 携帯電話で話す声	布団をたたむ音 店の中で話す人たちの声 ペンをおく音	布団をたたむ音 はしごを降りる音 友達の声 先生の声 自分の足音 友達の鼻歌 本をたたむ、入れる

〈結果の分析と考察〉

振り返りシートからは「この授業を受けて身近な音について耳を傾けることの楽しさをしました。『音』と聞くと、私のはじめのイメージでは、楽曲や歌声、楽器などの音をイメージしていました。しかし、音の世界はとても広く、身の周りにはたくさんの音があるのだと改めて気づきました」や「日常のありふれた音をこんなに集中して聴く機会はありませんのでとても新鮮だった」などの感想がほとんどの学生に見られた。そこから翻って「聞き逃してしまう音も、慣れていて聞こえない音もたくさんあるのだなと感じました。いつもはipodで音楽を聴いていて、周囲の音をあまり聞けていなかったの、発見と面白さがありました」と耳をふさいでいる現在の生活を考えたり「少し集中して耳を澄ますだけで、何気ない音も特別な音に

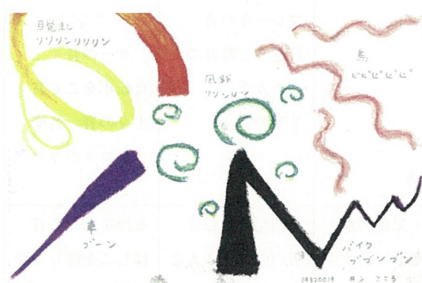
変わると感じた（傍点筆者）」など「音」とは何かという問いに至る学生もあった。

描画に関しては「目覚まし時計や風船のわれる音など刺激的な音には彩度の高い赤や黄色を使うことがおあったです」,「音が高い時には明るい色を選びやすく、音が低いときには暗い色を選びやすいことが多かった」,「好きな音は明るく、嫌な音は暗めの色で描く傾向があると思いました」など音刺激と色の間で心理的な相

関を見出した学生も多くいた。

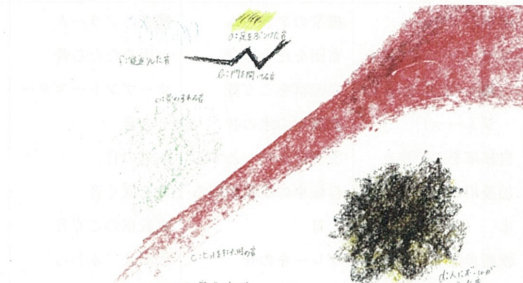
形としての表しは、大多数の学生がオシログラムのような波形の表現を何らかの音に用いており、音の表現方法として私たちの認知に文化的に組み込まれていることを改めて感じた。

また音源が特定できる音に対しては音源の固有な色や形態の特徴を図式化したものも散見された。(写真14)



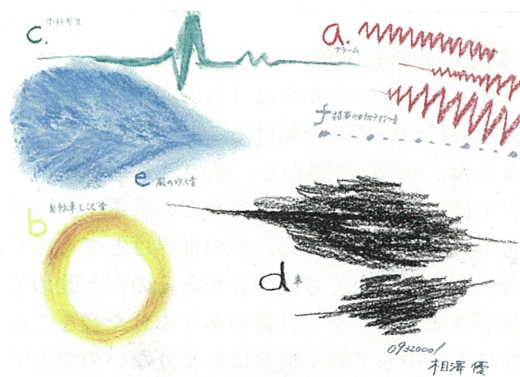
〈写真11〉音日記を描く①

左上：目覚まし 左下：車 中：風鈴 右上：鳥の声  
右下：バイクのふかす音



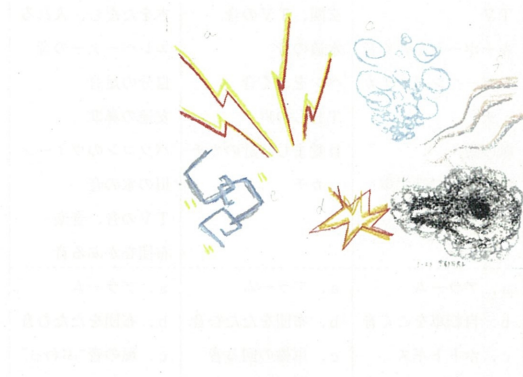
〈写真13〉音日記を描く③

左上：寝返りした音 左中：畳の擦れる音  
中上：足をぶつけた音 中上から二つ目：門を開ける音  
中央：ヒットを打った時の音 左下：人にボールが当たった音



〈写真12〉音日記を描く②

左上：ホトトギスの声 左中：風の吹く音  
左下：自転車をこぐ音 右上：アラームの音  
右中：携帯のカチカチ打つ音 右下：車の音



〈写真14〉音日記を描く④

左上：アラームの音 左下：氷の音 右上：炭酸の音  
右中：扇風機の音 中下：クラクション  
右下：車の音



## (2) キャンパスの音環境を描く

### 〈授業のねらい〉

個別の音を注意深く聴きながらも、個々の音が総合された音空間全体を音風景として感じとり、描画に表す。

### 〈授業の内容〉

#### 【課題14】京女の音環境を描画に表す

毎日、学生生活を送っている本学のキャンパスにはどのような音が聴こえているのだろうか。キャンパスの中を歩き、位置を定めて聴いた音をコンテパステルを用いて画用紙に描いてみよう。同じ場所でも季節や時間によって聴こえてくる音は異なることに注意しよう。

描くにあたって、次の三つのルールを設定した。

- ①八つ切り画用紙は縦横、自由に用いてよい。
- ②画用紙の方向を定めたら、聴き取った音の音源のある位置や方向と、画用紙の上下左右の方向を一致させて表す。
- ③音を聞き取った場所と時間を記録しておく。

### 〈結果の分析と考察〉

この「京女の音環境を描画に表す」の課題に臨むまでに、学生たちは「音声や言葉のリズム・抑揚と動きを連動させた描画活動」で「擬音」や「雨の音」、「風の音」を、「音日記を描く」では日常の身近な個々の音を、その音が含まれる音環境の現場から切り離して個別に描いてきた。しかし、ここでは歩きなれたキャンパスの特定の場所に位置したときに、多くの方向



〈写真15〉授業風景：京女の音環境を描く①



〈写真16〉授業風景：京女の音環境を描く②

から同時に、あるいは時間の経過に沿って聴こえてくるさまざまな音を、その空間の広がりとの関係性の中で捉えようとする。

音環境を表した描画『体育館の裏』(写真17)、『音楽棟の奥』(写真18)、『音楽棟の玄関前』(写真19)を比較してみよう。

例えばIさんの『体育館の裏』では聴こえてきた一つひとつの音の特徴、音の高さ、リズム、遠近が色の重なりや混色、形態、筆圧、ぼかしやかすれなどによって非常に注意深く、明快に表されている。「トンボが窓に当たった音」などは、まさにその場に居合わせなければ描き出せない色と形が実現されている。しかし、それぞれの音はまだ独立し、画用紙の矩形の空間のなかで羅列的といってよい。一音一音に集中して意識がむけられるためだが、Iさんには「音日記を描く」授業での音と描画を一対で表した経験がそのまま印象強く残っていたようだ。

それに対して『音楽棟のはじっこ(奥)』(写真18)と『音楽棟の玄関前』(写真19)は少し様相が異なっている。『音楽棟のはじっこ(奥)』では、画用紙の白い部分はほとんど残らず、画面全体を薄く覆うコンテの色の合間に見え隠れするだけである。画面左上方からさらに上の中央に向かって、黄色味がかった「カラスの鳴き声」が次第に小さく描かれる。そこから繋がるように右上方にサーモンピンクの途切れた波形の「小鳥の声」、直ぐ下に緑の鋭角的な「セミの鳴き声」、そして一段と明るい黄色の「鳥の声」と目が導かれる。さらに画面下方に目を移





〈写真17〉 描画：京女の音環境①

「7月14日午後4時頃 体育館の裏」

気づいた音：(左上から右へ順次)

人が歩く音、セミの鳴き声、鳥の声  
トンボが窓に当たった音、葉っぱのこすれあう  
音、風の音、ボイラーの音、コンテの音、ヘリ  
コプターの音

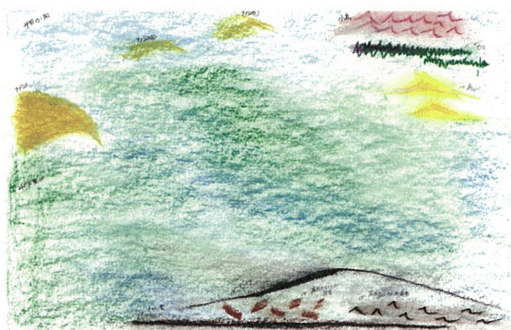


〈写真19〉 描画：京女の音環境③

「7月14日午後4時頃 音楽棟の玄関前」

気づいた音：(左上から右へ順次)

カラスの羽音、?の音、風の音、風の音、?の  
音、?の音?、足音、風の音、鳥の鳴き声、?  
の音、タンクの音、?の音



〈写真18〉 描画：京女の音環境②

「7月14日午後4時頃 音楽棟のはじっこ (奥)」

気づいた音：背景水色：風の音 背景緑：葉っぱの鞘ぐ音  
(左上から右へ順次)

カラス、カラス②、カラス③、 小鳥の声、  
セミの鳴き声、鳥の声、バイクの音、  
友達Sさんの足音、友達Iさんの足音 機械音

すと「バイクの音」が黒い線となって太さを変えながら山を描き右に消えていく。画用紙の下稜辺に平行して「機械音」が通奏低音のように静かに響いている。その間を縫って「友達の足音」が規則的に刻まれる。

描画全体の印象はどこか水墨画の茫洋とした風景を思わせるだろう。実際には『音楽棟のはじっこ』の場所は東西を音楽の学舎に挟まれ、囲い込まれた細長い通路が南の学舎に突き当たり、ようやく西側だけが開放された空地に抜け



〈写真20〉「音楽棟のはじっこ」の場所

るところである。(写真20)

作者のAさんは振り返りシート「今日の授業内容に、どのような感想をもちましたか?」の欄で次のように記している。「今日の気温はものすごく高く力が抜けたのですが、いざ絵を描き始めたらすごく集中できたので楽しかったです。自分から音を探すために歩き回ったので、絵を描く以上に気合が入って動き回りました。風の音がキレイで和みました」と。Aさんは図らずして画面全体に基調音<sup>12)</sup>である風と葉っぱの鞘ぐ音の色を描いている。

もう一つの『音楽棟の玄関前』も『音楽棟のはじっこ』のすぐ側にあって、学舎と高い石垣に囲まれた広がりがない場所である。画用紙の右半分を中心に、緑、そして明るい灰味がかつ



た青緑から緑味の青と三つの異なる風の音が描かれ、やわらかな形が画面に満ちている。左方向からカラスの羽音や人の足音が聴こえるが、下から唸るようなタンクの音も響いている。けれども、それぞれの音の輪郭は『体育館の裏』ほどには明瞭ではない。そして「?の音」と書かれた全くちがう音が六種類描かれている。私たちが耳を澄ませて聴こえてくる音は何の音か同定できるものばかりではない。むしろ何か分からないものも多いのが当然であろう。しかし私たちはその描かれた色や形から、どのような音であったのかを想像することができる。

三枚の描画は、鳥越が<sup>13)</sup> いうところの「音＝サウンド」と「サウンドスケープ＝音の風景」の基本的な違いや、「音を聴く」という体験の「基調音」と「信号音」の関係をも感じさせてくれる。つまり学生たちは、音を聴き、描くことによって、日常に視覚で捉えている見慣れた空間とはまったく違う空間世界が私たちの周囲に広がっていることに改めて気づくのである。

そして同時に、その表現の過程が新しい形態や混色、構成、コンテパステルの技法の発見となっている。

### Ⅲ. まとめと今後の課題

本稿で紹介した授業のねらいは、昨年度の授業実践から見えてきたいくつかの課題のうち

- ①音声や言葉のリズム・抑揚と動きを連動させた活動
- ②自然音と動き、形象（色、形）を連動させた活動

の二つを、如何にしてプログラム化し、総合的な表現教育のカリキュラム構築に資してゆくかというものである。

その一つが子どもの「なぐり描き」を活動モデルとして、「擬態語」を発声しながら動きや描画に表すことであった。子どものあそびや表現が音声、言葉、身体の動き、色や形の感覚として緊密に繋がり、それら相互の力によって生じるダイナミズムに没頭することを学生自身が追体験することである。

日本語は擬音語、特に擬態語の非常に多い言

語だと言われている。日本の幼い子どもたちは「わんわん」、「ぶーぶー」、「ぼんぼん」など生きものが発する擬声語や、ものの動きなどによって生じる擬音語をそのまま対象を指し示す名詞としても使っている。学生たちは擬音語を考えることを通して、対象がもつ聴覚的な特徴は、そのものの具体的な感覚感情を呼び起こす最も印象強い性質の一つであることを感じ取ったようである。また、日本語の擬音語や擬態語は2音節の反復から成り立っているものが多く、日本語の基調である2拍子のリズムを聴覚のみならず、動いたり描いたりすることによって運動感覚や視覚からも確かめ、気づくことができたものと思われる。

二つ目が、サウンドスケープ理論を背景に、生活の中の音に気づき、自然環境の音に耳を開くことによって、学生たちが音の肌理の感覚を取り戻し、身の周りに溢れている音を他の視覚や臭覚、触覚と関連付けながら感じることである。方法としては音日記をつけることによって音を言語化し音源名を示したり、擬音で表したりなどして、自分たちを取り囲む音が何の音であるか、どのくらいあるのかを意識化させた。そしてそのような個別の音に対する感覚の練成の後に、目には見えない音の風景を描画することによって全体として把握し、音色や高低、リズム、強弱、速さなどの音の質に迫り、音の匂いや肌触りにも触れようとした。そこには普段私たちが見ている見慣れた風景とは異なる空間が、目の前に広がってきたことであろう。

今回の実践を通して浮かび上がってきた事柄は「音響体 (sound object)」と「音事象 (sound event)」<sup>14)</sup> の問題である。

例えば「音のもつ動きを身体で表す」の課題の発表において、筆者らは音そのもの（音響体）がもつ性質を動きに変換する表現を予想し、学生たちに求めた。つまり、授業のねらいは声や音のもつ動勢、高さ、速度、進行、リズムなどを五感を通して感じ取り、全身を使って動きで表現することにある。しかし、特に自然音の「雨」や「風」の場合には、傘を差して歩いたり、強い風にむかって吹き飛ばされそうになり

ながら足を踏ん張る様子など、音（音事象）から連想された日常の情景を再現するパントマイムとして表現したグループが数例見られた。また、「音日記の音を描いてみよう」や「京女の音風景を描く」の課題においても、振り返りシートの中で「カラスの声は意外に音が高い」や「カラスも鳴く時々によって高さが全然違いました」と気づいて色相を選んでいるものと、逆に「前略—例えばカラスの鳴く音なら、真っ黒のコンテでばかしもあまり入れていなかったし、セミの鳴く音は明るい色で描いている自分がいまし」や「聴いた音を色で表現するが、見たことのあるものだとだいたい同じ色になる」、「音を表すとき、自分が見たことのあるものを思い浮かべて色を選んで（水の音→青色とか）」などの感想にあるように、音源が同定できる場合にはその音源の固有色で描いている学生も多くみられた。

そもそもサウンドスケープの思想には『聴覚文化復権の試み』と同時に『西洋近代文明の細分化した諸制度の再統合への志向』といった考え方があり<sup>15)</sup> のであり、それは必ずしも視覚に対する『聴覚の優位』を説くものではなく、むしろ日常の生活における空間体験は諸感覚に分断することはできず、最も大切なのはその空間における「気配」や「雰囲気」であることを示唆する。学生たちが過去の経験から、その音にまつわる情景や固有色を連想し、表現に用いることは当然なのだ。言うまでもなく「音響体」と「音事象」は本来一体のものであって境界があるわけではない。

しかしながら、学生の捉える「音事象」がややもすると類型的な慣習感覚から一歩も出られず、新しい表現の気づきが得られないこともある。「音事象」を捉える諸感覚や感性をしなやかで豊かなものにするためには、逆説的ではあるがそれぞれの知覚をある限定された条件のもとに研ぎ澄ませて練磨するトレーニングが必要であろう。これまでの個々の学生の育ちや経験から生まれる表現の幅を広げ、知覚の枠組みをずらしながら新しい発見のある内容や発問を今後も検討していきたい。

# 〈註〉

- 1) ①得能公子「幼児期の表現活動に求められる保育者の資質」『日本保育学会第62回大会発表論文集』p. 569 2009 ②宝塚市立西山幼稚園『平成20年度宝塚市教育委員会指定研究準備年度 研究のあゆみ』2008 ③宝塚市立西山幼稚園 園内研究会資料 2009
- 2) ①宇佐美明子・神原雅之「保育者養成における『保育内容表現』の授業改善」『国立音楽大学研究紀要』第42集 pp. 101-112, 2007 ②杉森のりこ・田中泉「保育者養成における身体と声をつなげる発声法の実践」『日本保育学会第62回大会発表論文集』p. 497 2009 ③本多峰和・小林田鶴子「保育士養成における「音・音楽」への気づきから表現教育へ」『日本保育学会第62回大会発表論文集』p. 498 2009
- 3) ①2009年7月8日に宝塚市立西山幼稚園 園内研究会において、兵庫教育大学の初田隆教授が4歳児クラスに音楽と造形を統合した保育実践を行い、山野・岡林もオブザーバーとして参加した。②今川恭子「身体から音の表現へ—幼稚園における音楽と造形の協同プロジェクトから」『日本音楽教育学会 第40回大会プログラム』p. 23 2009
- 4) 山野てるひ・岡林典子・ガハブカ奈美「音楽と造形の総合的な表現の可能性—「保育内容指導法（表現）」の授業における試み—」『京都女子大学 発達教育学部紀要』第5号 pp. 121-135 2008
- 5) 2009年2月8日に兵庫県立美術館 アトリエ1で行なわれた「総合芸術表現研究発表会」において、山野てるひ・岡林典子・ガハブカ奈美が研究発表「音楽と造形の総合的な表現の可能性—「保育内容指導法（表現）」の授業における試み—」を行なった。〔第3回 感覚をつないでひらく芸術を考える会 研究会報告集〕pp. 7-10, pp. 22-25 2009〕
- 6) 3) の①と同様
- 7) 1回ごとの授業の最後に「振り返りシート」と名づけた授業アンケートを配布して、下記の二つの設問に学生が自由に記述した後、回収した。設問①「あなたは今日の授業の中で、どのような気づきや発見がありましたか？」設問②「今日の授業内容に、どんな感想をもちましたか？」
- 8) 半期の全15回ある授業の第6回目の授業内容である。本稿では半期の全15回ある授業の第6回7回、第8回の授業内容について分析・考察を試みる。
- 9) 『ビクター効果音ライブラリー 4』より、46番と52番
- 10) 前掲書より 62番と74番
- 11) 日本語の擬音語では「濁音」は「清音」より、より大きな音やもの、より多い数や量、より



活発な動作や激しい程度を表す。反復形は音や動作の「連続、繰り返し」を感じさせ、「促音(っ)」は「スピード感」「瞬間性」「急な終わり方」をしているように感じられる。また「撥音(ん)」は「共鳴」を感じさせるなどイメージの与え方に規則性がある。

- 12) サウンドスケープでは調査分析の対象として三つの主要な音のカテゴリー、「基調音」、「信号音」、「標識音」を設定する。基調音とは全ての音の知覚のベースとなるものである。「基調音」と「信号音」は対を成す概念でゲシュタルト心理学の「地」と「図」に当たる。色彩においては「基調音」は基調色やドミナント色に相当すると考えられる。
- 13) 鳥越けいこ「2 音風景の解析」『サウンドスケープ』鹿島出版会 pp. 107-132 1997
- 14) シェーファーは特定のサウンドスケープの中で人間の耳によって知覚される最も小さな独立した音要素を「音響体」と「音事象」の二つの概念に分ける。「音響体」とは音を発生の際の様々な文脈から抜き取り、純粋に音響

的な対象として捉えたものである。それに対して「音事象」は音響的性格からくる意味だけではなく、その音を含んだ社会的、環境的文脈から捉える態度である。

- 15) 前掲8) p. 23

#### ＜参考文献＞

- 1) 笈寿雄・田守育啓吾『オノマトピア・擬音擬態語の楽園』勁草書房 1993
- 2) 笈寿雄『オノマトペ・擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店 2002
- 3) R・マリー・シェーファー, 訳 鳥越けい子・若尾 裕・今田匡彦『サウンド・エドケーション』春秋社 1992
- 4) R・マリー・シェーファー, 今田匡彦『音さがしの本』春秋社 1996
- 5) R・M・シェーファー, 訳 鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾 裕『世界の調律—サウンドスケープとはなにか』平凡社 2006